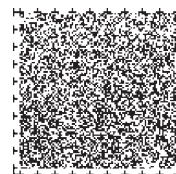


平成22年度障害者週間記念事業開催報告(2)

①国リハセンター子ども体験デー

管理部企画課



国立障害者リハビリテーションセンターでは、障害者週間記念事業の一環として、平成22年12月1日（水）、12月10日（金）の両日、「国リハセンター子ども体験デー」を実施いたしました。体験デーに、所沢市内の3つの小学校（美原小学校、伸栄小学校、並木小学校）から249名の子どもたちが参加され、アイマスク、障害者スポーツ、手話、ロボットなど様々な体験プログラムを用意してお迎えしました。

アイマスクでは、アイマスクをつけて目の見えない方の疑似体験をしたほか、シミュレーションレンズキッドを使って、ロービジョンの方の物の見えにくさを体験しました。障害者スポーツでは、車椅子バスケットや視覚障害者のスポーツであるゴールボールを体験しました。手話では、手話通訳学科の先生より直接手話の手ほどきを受け、名前や数、色の表し方などを学びました。ロボットでは、コミュニ

ケーションロボット「PaPeRo」との対話のほか、ロボットアームや股義足ロボット、筋電義手を体験しました。

こうした体験を通して、子どもたちは、手や足、耳や目などに障害を持ったときの日常生活での不自由さを学ぶと同時に、障害を補う様々な手段や方法があること、またそうした手段・方法を取得するためにリハビリや訓練が必要であることを学んだようです。

子どもたちからは「とてもいい勉強になった」「とても楽しかった」「また体験してみたい」との声をたくさんいただきました。当センターとしても、障害者リハビリテーションの総合的・中核的な機関としての特性を生かして、今後とも地域の子どもたちが障害について楽しく体験しながら学べる機会を提供していきたいと考えております。

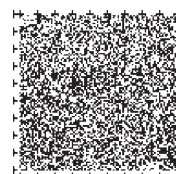
●開講式



たくさんの子どもたちが「子ども体験デー」に訪れました。



岩谷総長より挨拶。



●アイマスク体験



アイマスク体験の様子。



ロービジョンの方の見えにくさについて説明を受けました。



シミュレーションレンズキッドを使ってロービジョンの方の見えにくさを体験しました。

●障害者スポーツ体験



段差での車椅子の操作法について説明を受けました。



車椅子バスケットを体験。



視覚障害者のスポーツ「ゴールボール」について説明を受けました。



アイマスクをつけてゴールボールを体験。

●手話体験



手話を使って、名前や数字、色の表し方について学びました。

●ロボット体験



筋電義手を使ってお菓子をつまむ体験をしました。



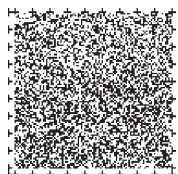
キーボードを使ってロボットアームを動かし、ペットボトルの蓋をつまみます。



ロボットアームを動かし、スプーンが口元に来ればお菓子が口に入ります。



股義足ロボットの説明を受けました。



〔センター行事〕

②研究所オープンハウス

研究所 運動機能系障害研究部 小川 哲也

12月3日（金）に当センター研究所を会場に開催された「研究所オープンハウス」について報告させていただきます。

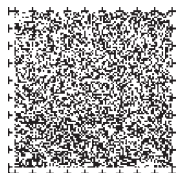
このイベントは日頃研究所で行われている医学、工学、心理学、社会科学などを基盤とした各分野の研究について広く一般に認知いただくことを目的に毎年12月の障害者週間にあわせて開催されています。平成18年度の初回以来今回で5回目の開催となりました。来場者は年々増加傾向にあり、今年度も医療福祉関連の専門職や専門職を志す学生、ご本人やご家族が障害を抱える方々、さらには近隣にお住まいの方々を中心に300名近い方々にご来場いただきました。各展示会場では研究担当者の説明に熱心に聞き入ったりメモをとったりする姿があちこちで見受けられ、また、たくさんのご質問、ご意見をいただくなど関心の高さを窺い知ることができました。

研究所における業務の内容については一般になかなかご理解を得難い一面もあるかと思いますが、このようなイベントを通してその内容を努めてわかりやすい言葉で一般にご説明する、ひいてはその意義をきちんとご理解いただくことは極めて重要であり、また、研究者としての社会的な立ち位置を確認する意味でも重要であると感じました。

以下、各研究部の展示について代表的な内容をご紹介します。

○ 脳機能系障害研究部（今年度の10月に発足）

脳が発する信号を読み取って、手足が不自由な方でも身体を動かすことなく家庭の電化製品などの機械を操作（生活環境を制御）することのできる技術（ブレイン・マシン・インターフェース）についての映像による紹介と、自閉症など発達障害の客観的評価・診断をできるようにするための検査方法について、パネルによる展示が行われました。



○ 運動機能系障害研究部

損傷脊髄のメカニズムの解明と治療法の探索に関する分子生物学的な基礎研究や、ヒトを対象とした基礎研究の成果を基盤としたリハビリテーション方法の開発について、動画やパネルによる展示や、実験で使用する装置が紹介されました。また、主に脊髄損傷後に生じる褥瘡の予防に関して、動物モデルによるメカニズムの解明とこれに基づいた臨床応用の成果が紹介されました。

○ 感覚機能系障害研究部

耳の聞こえない方が使う手話言語の学習をしやすくするための「手話言語—日本語」の電子辞書の作成に関する研究や、吃音（言葉がスムーズに言えず、どもってしまうこと）について、脳機能との関連づけた研究が紹介されました。

○ 福祉機器開発部

障害のある人や高齢者を対象とした福祉機器、例えば手や足を切断した人が使う義肢や装具、車いすなどの移動支援機器、コミュニケーションを支援する情報機器、認知症のある人や発達障害のある人を支援するための福祉機器が紹介され、実際に使用体験をしていただきました。

○ 障害工学研究部

網膜色素変性症による網膜の変性と再生に関する遺伝子解析に基づいた研究が紹介されました。また、障害者を支援する機器やそれらの部品の開発の過程についてのパネル展示や実際に開発された機器を用いたデモンストレーションが行われました。

○ 障害福祉研究部

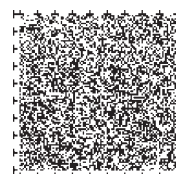
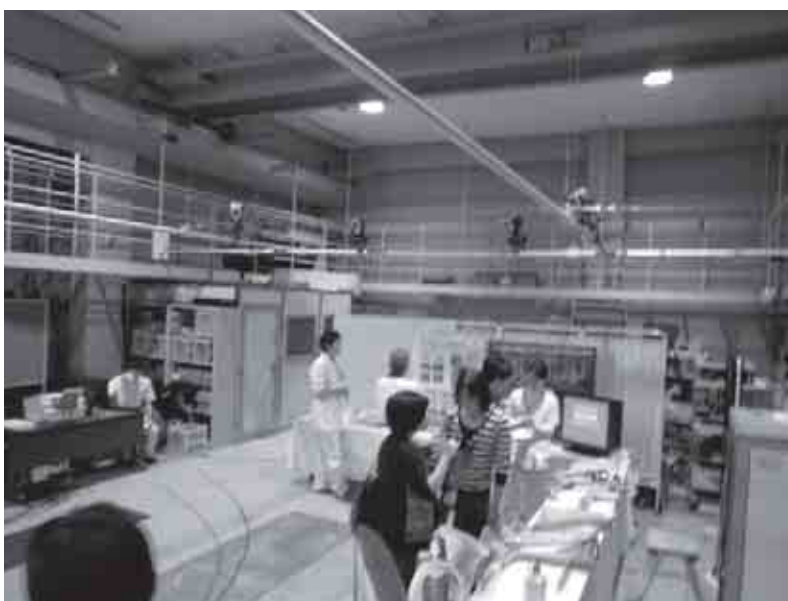
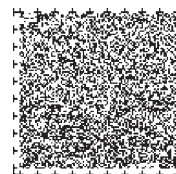
視覚障害・精神障害・発達障害・高次脳機能障害などの障害により通常の紙の本を読むことが困難な人に対する情報支援を目的とした情報機器（電子図書）による読み支援に関する研究や、特殊なニーズのある子ども（人）のきょうだいに対する支援システムの構築などが紹介されました。

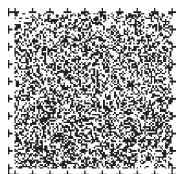
○ 義肢装具技術研究部

様々な義肢・義足・装具などの展示や、実際の義足ユーザーによる歩行のデモンストレーションが行われました。また、簡易歩行計測装置を用いて来場者の方々に歩様の計測を実際に体験していただきました。

○ 発達障害情報センター

発達障害（自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害、その他これに類する脳機能障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの）に関する正しい、確かな情報の提供を目的とした書籍やウェブサイトなどが紹介されました。





③ふれあいコンサート（クリスマス会）

病院 3階病棟

3階病棟では毎年クリスマス会を行っています。今年度は12月15日に障害者週間記念事業の一環として「ふれあいコンサート」として実施いたしました。

患者さんは入院していると外出する機会が少なく、なかなか季節を感じることができません。患者さんに季節を感じて頂きたいことと、毎日少しでも良くなりたくリハビリに励んでいる患者さんと、患者さんを支えるご家族の方々に、ひとときでもホッと頂きたいということを目的としています。またクリスマス会の準備として、2週間前から患者さんと共に飾り作りなどを行い、患者さん主体によるクリスマス会になるように看護師は関わっています。

クリスマス会の定番はなんと言っても、小野沢登志子先生によるコーラスです。小野沢先生は小学校の音楽の先生として30年間勤務し、平成2年から当センターにボランティアとして来て下さり、先生のコーラスは患者さんの楽しみや励みになっています。

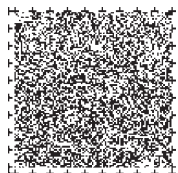
看護師は入院した全ての患者さんに、医療者・看護師への希望や困っていることを伺っています。患

者さんのお一人に「カラオケで歌えるようになりたい」と希望した方がいました。その患者さんは、日頃のリハビリの成果でもあります。毎月来られている小野沢先生のおかげで自分はこんなに声が出るようになった。発声練習の時に大きな声を出したことで声を出すコツを掴んだ。」と常日頃から話していました。

その患者さんからクリスマス会でカラオケをしたいという申し出があり、クリスマス会では多くの方の前で素敵な歌声をご披露下さいました。入院当初の「カラオケで歌えるようになりたい」という念願を叶える一歩になったのではないのでしょうか。

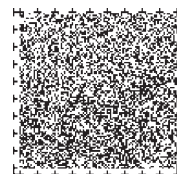
また、患者さんのご家族による手品や、STの学生によるハンドベルや三線はどちらもなかなか本格的で、クリスマス会を大いに盛り上げてくれました。今回のクリスマス会は患者さん、ご家族が参加して下さいたこともあり、例年以上に温かい会になったように感じました。

センター職員で楽器など芸事のできる方、3階病棟の七夕会やクリスマス会でご披露下さいませんか。



平成22年度「第27回業績発表会」 開催報告

管理部企画課



第27回業績発表会は、平成22年12月22日（水）に、例年通り、センター本館大会議室を第1会場、中・小会議室を第2会場に分けて開催いたしました。

この業績発表会は、職員がその事業や学術研究のうえで、成し遂げた成果を発表・討議する機会を設けることによって、職員相互の研鑽と連帯の強化を図り、効果的・総合的なリハビリテーションの推進を図ることを目的に昭和59年度から毎年12月に開催されているものです。

平成12年度からは、他の国立更生援護施設の職員にも参加を呼びかけ、今年度は、神戸視力障害センター、伊東重度障害者センター、秩父学園からの参加も含め、演題数51題（口頭発表47題、ポスター発表4題）と昨年より多くの参加がありました。

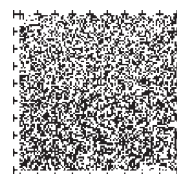
業績発表は、演題を障害毎にセッションに分け、そのセッション分野の専門の職員が座長として進行に当たり、発表とそれに対する質疑応答を通して相

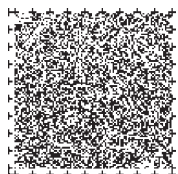
互の理解を深めることとしています。

今回の特色として一つ目は、一つのテーマについて複数で発表することにより、一面的でなく多面的に捉えることができた演題が多く見られ、その中でもセンターが実施している「青年期発達障害者の地域生活移行への就労支援に関するモデル事業」については、自立支援局、病院及び研究所が共同し、さまざまな視点からの発表があり、職員にとって事業の概要がイメージしやすい演出となったようです。

二つ目は、複数年度にわたり継続して研究及び調査を実施し、経年経過が良くわかる演題発表も数多く見られました。

業績発表の後に特別講演として、当センターの運営委員会の委員である東京大学高齢社会総合研究機構長 鎌田 実氏をお招きして、「ジェロントロジー概論」を演題に大変貴重なお話を伺うことが出来ました。





最後に、本日の発表者のなかから優秀な発表に、総長より次の方々に表彰状が授与されました。

○優秀賞	
自立支援局理療教育・就労支援部	近藤 和弘
自立支援局自立訓練部	菅原由貴子
自立支援局総合相談支援部	阿部 真市
病院看護部	吉田 尚子
研究所感覚機能系障害研究部	蔡 暢
研究所福祉機器開発部	山中 康弘
○奨励賞	
研究所福祉機器開発部	寺田 容子
研究所運動機能系障害研究部	加藤えみか
○特別賞	
自立支援局伊東重度障害者センター	菅野 博也
自立支援局神戸視力障害センター	今井 進

優秀賞受賞者（上記の6名）の皆さんからは、発表の概要を含め、今後の抱負等について、「第27回業績発表会職員表彰報告」として本誌2月号でご紹介する予定です。

なお、全演題・発表者及び予稿（一部未公開を除く）については、センターホームページに掲載しておりますのでご覧いただければ幸いです。

